

小澤重男先生を偲ぶ

小澤重男先生の思い出 Memories of Professor Shigeo Ozawa

吉 田 順 一

(早稲田大学名誉教授)

YOSHIDA Jun'ichi

(Professor Emeritus, Waseda University)

私が小澤重男先生のお名前をはじめて知ったのは、大学院の修士課程の1年の後半の時期であった。前年の5月連休明けに、指導教授の松田壽男(まつだひさお)先生から、モンゴル史を研究するように指導され、その指導を受け入れたものの、それまでモンゴル史に何の関心もなかったから、どこから手をつければよいのかわからない。ともかく何でもよいからモンゴル史関係の本を読んでみようと思って東洋史の概説書を読むと、モンゴル史で目立つのはやはりモンゴル帝国史であったから、その時代の史料を読んでみようとした。そして選んだのが『モンゴル秘史』であった。だがそれは古い時代のモンゴル語の文献だから、当時の私には読めるわけがない。幸いに『モンゴル秘史』の訳注本として那珂通世博士の名著『成吉思汗実録』があることを知り、それを夏季休業中に苦勞しながら読んだ。これが私のモンゴル史研究のはじまりとなったのである。

『成吉思汗実録』を和訳本で読んだ後、モンゴル史を研究する以上はモンゴル語で『モンゴル秘史』を読まなければならないと考え、松田先生に相談したところ、小澤重男先生を紹介してくれた。当時松田先生は、東京外国語大学モンゴル語科で歴史の講義を担当しておられたのであった。

そこで、モンゴル語を少しばかり勉強して、小澤先生の講義に出席させてもらったのであるが、驚いたことにその講義内容というのは、現代モンゴル語とはかけはなれた古い時代のモンゴル文で書かれた『モンゴル秘史』を、一語一語を丁寧に解釈しながら読むというもので、1回の授業に、わずか数行分しか進まなかった。それだから、モンゴル語とりわけ現代モンゴル語を学ぶのに役立つものではなかったが、『モンゴル秘史』のモンゴル語を理解するのにたいへん有意義であった。

その頃の思い出に、小澤先生に誘われて、東洋大学の金岡秀友教授のチベット語の授業に小澤先生と並んで1年間出席したことがある。ものにはならなかったが、小澤先生に関する懐かしい思い出のひとつである。

その後、東京外国語大学における松田壽男先生の講義を、私が譲り受け、かなり長く東京外国語大学でモンゴル史の授業を担当したのであるが、またそれとともに小澤先生が日本モンゴル学会の会長を務められた間、岡田和行さんや窪田新一さんと日本モンゴル学会を支える事務上の仕事を、

これまた結構長く務め、それは小澤先生が会長を退かれ、学会事務局が関西に移るまで続いたのである。私は、小澤先生は私たちを信頼して下さったと思っている。

その間の思い出としては、保谷の公務員住宅にあったお宅から入間市への転居のさいに、私も蓮見さんなどとともにお手伝いをしたことがある。引っ越しの準備が十分でなかったから苦労したが、引っ越し先の入間川を間近に臨む入間ビレッジの8階に到着したときには、眼下に入間川があり、当時釣りを楽しんでいた私にとって、非常にうらやましい気持ちになったことを思い出す。

小澤先生は退職後、日本モンゴル学会会長を退かれるときに、某大学の学会大会会場において京都府立大学の若松寛教授と私に後事を託されたのであるが、若松会長のもとで、日本モンゴル学会の運営は小澤先生の期待するものとは異なるものとなった。

小澤先生は、退職後、『モンゴル秘史』の研究に邁進され、私は今も、その学恩に浴しているのであるが、小澤先生は、ときどき拙宅に電話を下さった。その話題は、いつも東京外国語大学のモンゴル語科とモンゴル研究についてのもので、ときには感極まることもおありであった。

私は、『モンゴル秘史』を早稲田大学文学部の演習の授業で長く使い、モンゴル史の研究も『モンゴル秘史』に絡むものが多かったから、小澤先生の『元朝秘史全釈』のお世話になることが多かった。そして、それは今も同じである。小澤先生に感謝するのみである。